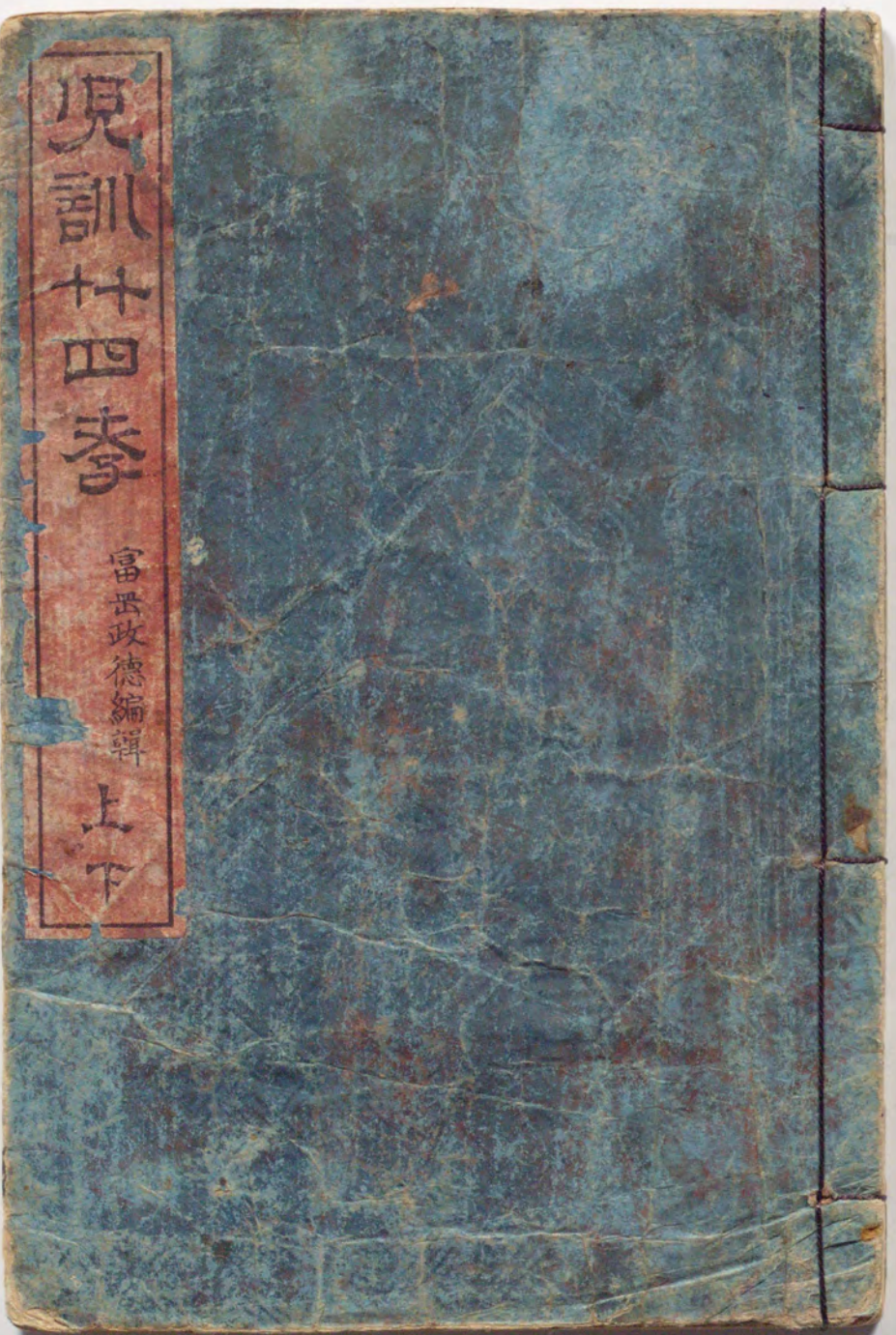
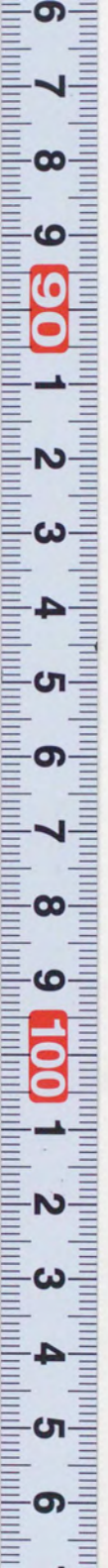




曆口堂上梓

児訓二十四孝

富岡政徳編輯
歌川國曆畫



孝の徳より夫は夫大なる哉天神地祇も之を感
動し強賊惡獸も之を畏服も亦これ孝子に
由るの傳へ普く人々之を膾炙し之を能く奉
知らしむるこそ久しけれ知推して知れば
善道に導びんとする所の方便なりまれば孝
人として必ず履望ふの道あり此をわが
家一人として人道の背反する者あらんや故
に聖者も此道を示して教へて来世も垂るる

や知^ちの目^めふ達^{たつ}て人^{ひと}皆^{みな}夢^{ゆめ}に就^つくさうなく修^{しゆ}身^{しん}
 の教^{かう}へ亦^{また}此^こ中^{ちゆう}に可^かく加^かふ類^{るい}書^{しよ}江^{かう}湖^このふ
 うらぐと雖^{いひ}も尚^{なほ}是^こよりとすべし其^{その}努^{ゆめ}めを弘^{ひろ}
 むべし此^こを以^{もつ}て天^{てん}神^{しん}地^ち祇^ぎも之^{これ}を感^{かん}動^{どう}
 淫^{やん}賊^{そく}惡^{あく}獸^{じゆう}も之^{これ}を畏^{おそ}服^{ふく}と孝^{かう}忠^{ちゆう}德^{とく}をまさ
 大^{だい}なる哉^{かな}

明治十六年季秋著都乃士志



魯^ろの
 國^{こく}の必^{かならず}
 女^にあり
 父^{ちち}の事^{こと}
 へて孝^{かう}ん父^{ちち}と共^{とも}山^{やま}へ行^いきし時^{とき}
 虎^こ來^きて父^{ちち}を食^くりんと
 楊^{やう}香^{かう}虎^この首^{くび}を
 我^{われ}を食^くか
 て父^{ちち}を助^{たす}けよ

あげきけれハ猛^{もう}獸^{じゆう}とて
 とも其^{その}の孝^{かう}心^{しん}を感^{かん}じ
 てあけうせ
 こころを

楊^{やう}香^{かう}
 猛^{もう}虎^こ
 救^{きう}父^ふ

大舜の諸
 馮と云明
 お生れ父
 お鼓腹
 と云幼
 くして
 母を
 喪ふ繼
 母お象
 とつと
 男子あり
 父頑お
 して後
 妻の子

眞舜
 孝感動天



唯父母
 順あり終に
 大孝の名
 あらわれ
 堯帝これ
 天下を憚
 曾て
 歴山に耕をとき

鳥獸
 来りてその
 徳を助く孝徳の
 天を感ぜしむくの
 こと

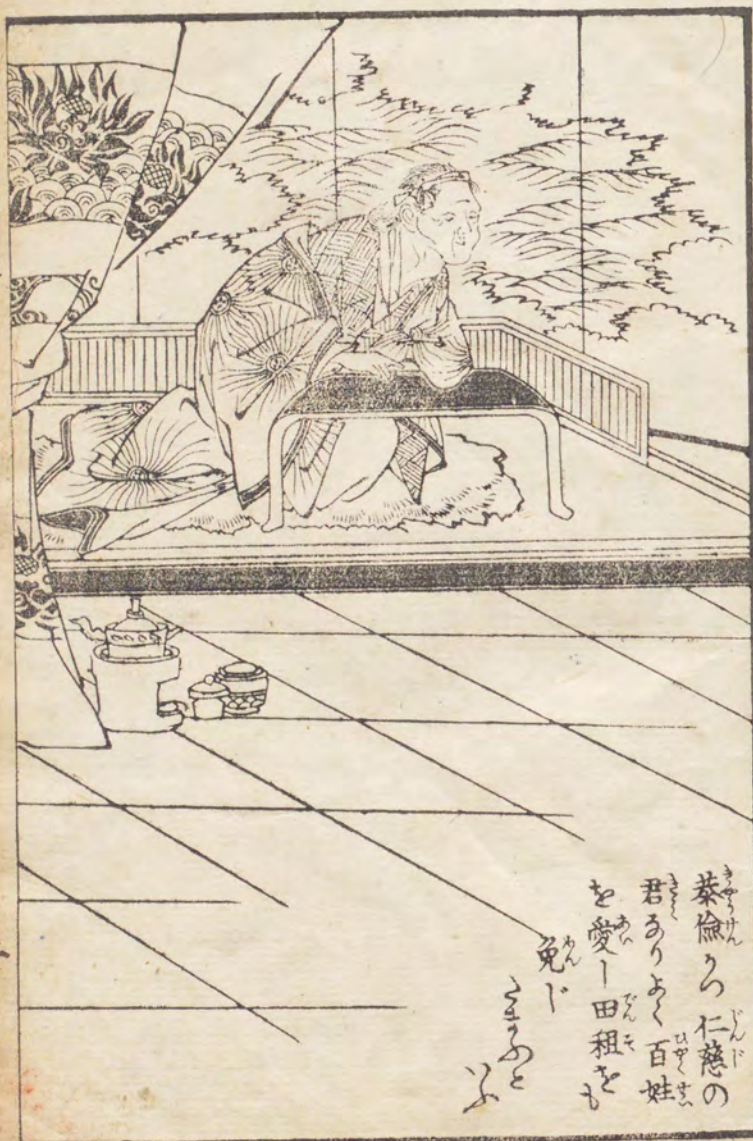
漢文帝 親嘗湯藥

帝の名を恒と云ふ高祖の中子ありて天子の位に即ぐ母を
薄太后といふ母病み罹りてまゐるときは昼夜
衣冠をとき
こま
つぎ
薬を嘗て
これを試み朝夕の
食にいつるまで
自ら母にさぐめ
する尊とき天子の
御身にしく斯く親み事へ



御身にしく斯く親み事へ

ふまのありぐんき
あまの帝めと



恭儉なる仁徳の
君ありて百姓
を愛し田租を
免し



○ 閔損泣いて父を諫めひとすら
母の罪を謝せりと



閔損 單衣順母
字の子禽孔子の弟子ありと
父母の孝あり如くして母
に後れ繼母の二人の子あり母
閔損をやめども恨みず或とき
父と共に出るにあり父の寒
みえがときさまを見てその衣をこれに綿を
入れずありと父大に怒りて後妻を去らんとす。



仲由 爲親買米

仲由の孔子の弟子あり家
貧しく人の米を乞ひ
その賃錢を取りて餓く
父母をやある父母没して
後君ふ仕へて大なる功あり
つひに富貴の身とあれども
それをあるこそ曾て貧しき
とき父母をやあるいふべき
ことの常あり

あけきうあ

ふーと



強て妻とみ
 らんことを願
 ふより共ふ
 主人の家又
 到りけりが
 其美人一月
 にして三百匹
 の絹を織りそ
 のおひめをつく
 のひ我の天の織
 女あり汝が孝心
 お感じておひ
 めをつくるおひ
 とく雲ふ



董永
 賣身葬父
 董永の後漢の人
 あり母を後れ父の事
 へて孝あり父没されども
 葬むべきにてあつねあ
 雇ふ主人ふその由を告げ
 錢十貫文を借り永くその
 家の召仕とらんと約束し錢
 を得て父を葬む而して其
 家にお到らんとす道ふて美人

のりて去り
 ーとぞ



剡子
鹿乳奉親



剡子其姓氏を詳らかふせど
 伝て孝行の名あり
 父母老て眼を患ひ医療
 を乞ひふ鹿の
 乳を用ゐされ治
 ぐといふまれば
 死せる鹿より乳を
 求るよりみきあ鹿の皮を着て山中へ
 行き鹿とまじりて乳を求めんとす獵人
 これを射らんとす剡子ちどろきて其實を
 語りければ獵人もちひみ感
 弓矢をもちて去りぬこれ天
 孝行の志をめぐりて必死の矢を
 まぬがれしやあるべしと



陸績 懷橘遺母

三國のときの人あつて六歳のとき袁術といふ人のもとへ行き
 する橘を盛りて出して陸績三箇をふところあ入れ歸
 らんとするととき腰をうめければ懷より落ちたり
 袁術おもひみ其ゆきを咎めければ珍ら
 しき果子をむけお食さんより持ちよりて
 母あへんあありと答へ
 ければ座中の人あへ
 感んせりとす





唐の世の人にて
 姑長孫夫人に
 孝あり姑老て
 食事心不任せむ
 朝夕乳をふくめ
 て養ひるや



長壽を保てり姑
 病で死ふのぞみ
 子孫を招き我
 が長命せし
 唐夫人の恩
 あり今其恩を
 も報へずと死するこそ
 うらみあり子孫のともが
 らこの夫人の孝心をも
 び行あらん永く繁榮を
 らんと遺言せりとらん

唐夫人
 乳姑不怠



孝心ありきこと
感ぜるもあま

あま



吳孟
蚊飽血

吳孟何れの世の人と
るを知らず八歳ありて
孝行の名を稱せ
る家貧ありて
蚊帳より裸体
ありて

父母の側
の側
心ありて父母の
血をすくふことをせ父母の
老て血氣薄し我の血氣さん
あれは飽まで食ふべしとて
身をときぎ父母のく
へとびやんとせられしれ
恣まき我身をあそけり如く

蚊帳より裸体
ありて
心ありて父母の
血をすくふことをせ父母の
老て血氣薄し我の血氣さん
あれは飽まで食ふべしとて
身をときぎ父母のく
へとびやんとせられしれ
恣まき我身をあそけり如く



のち五
 十年を経て父も繼
 母も死せしむ官をす
 て實母の行をせむ
 とあ天地あいのりけり
 このとき母ハ七十を
 あく猶存命いとせむ
 めぐりあいのありこふと
 かぎりありまこととあ
 孝心の天わつう
 なるありこふ

父美女をもとめて壽昌の
 母を去り壽昌あぐり
 きとかぎりあけれども
 色あもわらひさぐ父
 と後の母と
 小事へて
 孝行をつ
 めりけり

あへり



朱壽昌七歳のとき

壽昌
 棄官尋母

上

下



王哀
 の母甚なり
 雷を恐る
 雷の催あ
 れば遠くお行
 きても直まお歸
 りて母をみる
 けつぐ母死後
 雷の鳴る母墓へ
 行きて母びと恐れとある
 王哀こふありとて墓の
 くりしを去らざりしとぞ

王哀
 聞雷
 泣墓



曾子孔子の弟子あり山へ薪をとり小行
 きしあどて母の親き人來れり母もてるさんと
 思へども心ふまらず曾子の早く歸らんを
 かみひ指をうぬけり曾子の山あて胸痛をける
 母不其を告
 孝子親をわ
 急ぎ歸りし
 客の既お歸れり

曾子
 憂指痛心



欲されども江ふ氷より
つめ魚を得る由あり
されども孝心ありく
寒中氷の上を臥
心は魚を得んことを
念ふければ氷王祥が
臥するかちふとけ
二ひきの魚むどりいぞ
こうようこびもち
歸り母にまぐめける
とぞ孝徳の
天をんぜむる
かくのあと

郭巨

爲母埋子

郭巨、後漢の人あり、家
貧しくして老母をや
るゝ食の乏しきを
くみむ。老母をま
三歳の孫をわく
て食を別ちて
あてゐるや、
郭巨、
巨夫
婦これ
うれひつひふその子を



埋めんとむる
黄金の二金を

得たり

其銘を曰く

天孝子郭

巨を賜ふと

これより家富て

まむ

孝行を

つらうと

子



庚黔妻

嘗冀憂心

南齊の人なりて王將陵と
いふところの縣令とあり
任所あやきと幾あどの
かくむるさきぎし身あ
汗出づればさとし
故郷の父の
身の上事
あらんと
官を



きて急ぎ家へ
歸り果して父
重き病を患ひけ
る皆くその早く
歸れるをぶくりけ
り
一決策
を語り
父病て二
日あけ醫師
の云ける其の味
苦ければ治まじ
甘ければ治まじ
と自くら其糞を



嘗むる味ひ甘うり
ければ大お力をかり
夕べあつて北辰
祈りて身代りと
あらんとを求む孝徳の
あまところつひふ
父の病癒



黄香

扇枕

温衾

黄香の後漢の人
あり家貧



とて酷く父の
事へ夏

父の床を扇ぎ

冬は我の躰を覆ふ

床をあそめ

父を臥さめけり

その孝徳せま

うられあへつゝ

朝お仕へて

官尚書令あり

魏郡の太守と

ありとぞ



姜詩

湧泉躍鯉

姜詩の後漢の人あり

識く母事ふ

そのつは龐氏もまゝ

姑の孝をつく

けり

母つねふ

井の

水を

きらひ

江の水を好めども



家の近くふよき江の水

あきおより龐氏日々遠き

所より水を吸て来り母あ

まむ或とき姜詩が家の

傍らふよき泉わき

出で江の水は異

あらずまゝこの水に

毎日二ひきの鯉ら

びて母あ奉つ

食のさそけと

あれりと
まん





老菜子

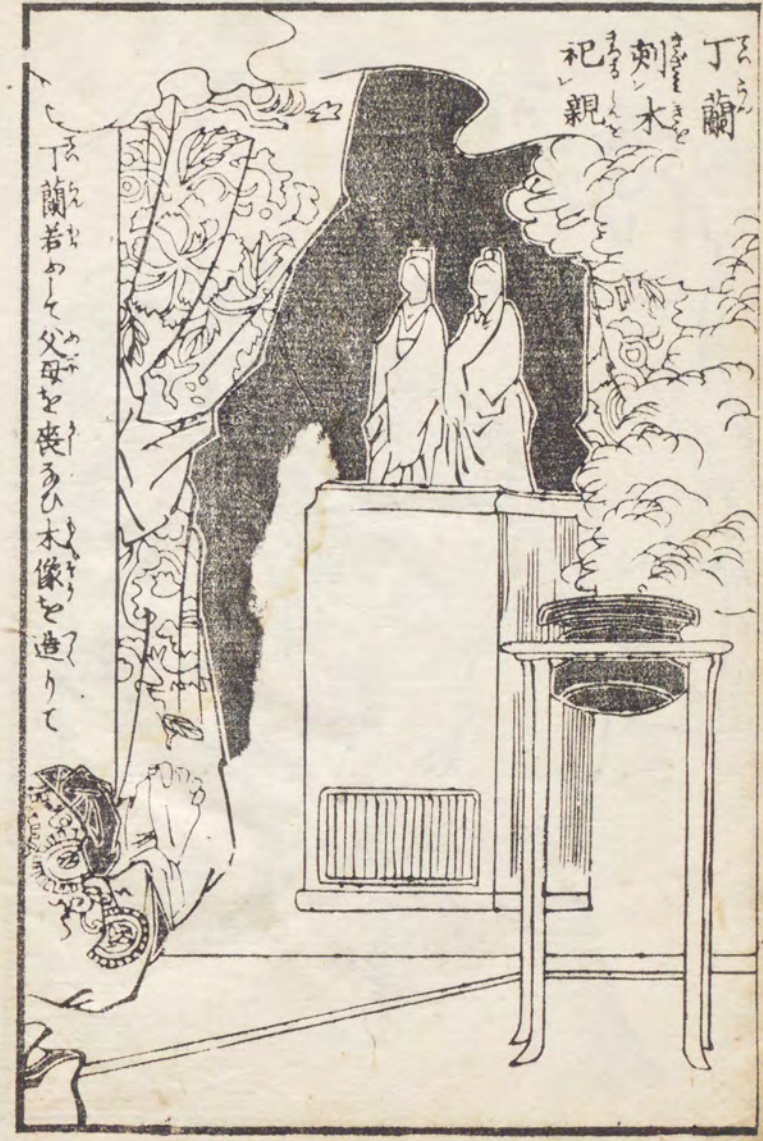
戲絲娛親



老菜子の身七十歳ふ
 りまれども父母いまだ
 存命ありは我が
 身の老ることを
 悲しむまゝ
 とを恐れ
 五色の衣
 ものを着て小兒
 の戯むれどあゝ我
 時の故らふ跌つき仆
 れて泣きあどそとより
 るさまを以てあらざる父母を

あぐさめしとぞ





孟京

泣竹

生筆

孟仁とふ

呉の國の人あり母

賢女の聞へあり

くろふ年老て病お罹り

熱ふ。

うらされて冬の日



そめけれが

老病つひあ

養ふとぞ

孝行の徳

實ふくんぞき

九

竹の子を好むけり

孟に孝心あり

けれが直ちふ

竹林に入り

天ふいのり

て泣き

ふどき

ふ竹の子

忽ちあ雪を貫きて

生下けり喜び

あり得て母よ



張孝 張禮 兄弟 讓生



これぞ
まて二人
生を譲り
やひてやま
さりけれ
賊その孝
心を感
米二石と
塩一駄を
あてし
とふ



あり此食をあてし
来んと約束し
兄の張孝



明治十六年十二月六日御届
 同 年十二月廿三日出版

編輯人

出版人

賣弘書肆

同

本所區横綱町二丁目九番地

富岡政徳

日本橋區濱町二丁目十九番地

島村吉松

同區馬喰町三丁目

島村利助

本郷區春木町三丁目

同 支店

裁縫問答

全一冊

小學女禮式

全一冊

児訃廿四孝

全一冊

假名入三字經讀本

全一冊

和古今英勇競 全一冊 近刺

